第494号（通巻596号）　平成27年10月10日発行（毎月１回10日発行）　昭和57年６月21日第３種郵便物認可

# 保育界

2015
10

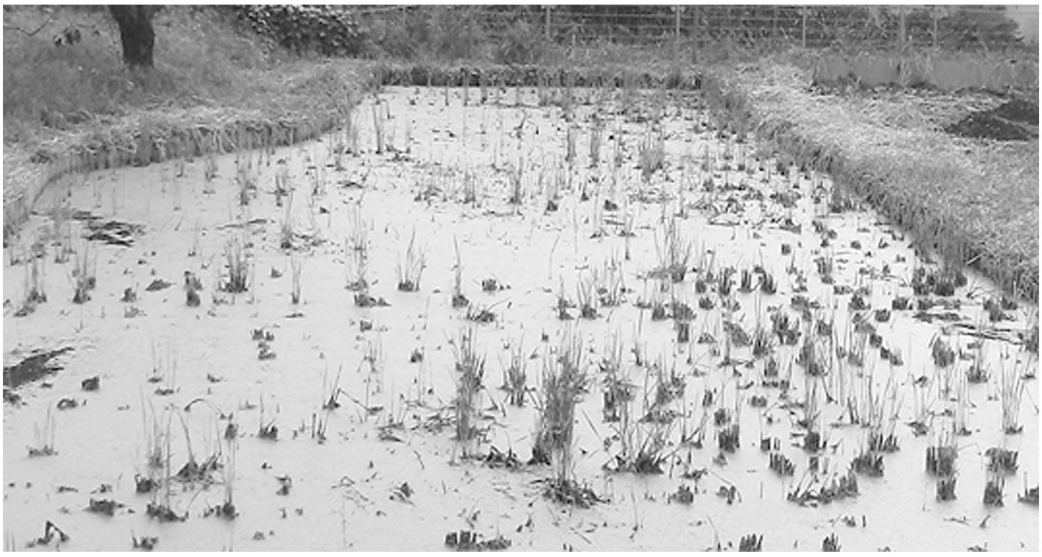
発行　日本保育協会

# 田んぼ

公益財団法人 日本生態系協会
教育研究センター長　田邊龍太

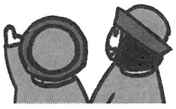
自然との触れ合いは、思いやる心、命やものを大切にする心を育みます。

こうした“自然の保育力”を活かすためには、園児が普段生活する範囲内に自然と触れ合う空間を設ける必要があります。ここでは園庭ビオトープの施工や管理活用のノウハウをご紹介します。



稲刈りした後も水を張り続ける円福幼稚園（長野県）の田んぼ／「全国学校・園庭ビオトープコンクール2013」で日本生態系協会賞を受賞

## 『いつも　水ありたんぼ』



食育などで利用する田んぼ。10 月は、稲刈りが終わり、乾いた土に稲株が残る空間になっているところも少なくないでしょう。田んぼは稲を育てる場所にとどまりません。工夫次第で、湿地の代わりとして、野鳥、トンボのヤゴ、ゲンゴロウの仲間、ミズカマキリ、ミジンコなどたくさんの生きものを育む場所になります。

**ポイントは、年間を通して、いつも水がある場所をつくっておくことです。**全面に水を張る必要はありません。一年中、部分的にでも、ひたひたの水があることで、より多くの生きものがくらし始めます。早春にアカガエルやヒキガエルが産卵に訪れるかもしれません。初夏には、田んぼで冬を過ごしたヤゴが羽化し、そうした瞬間に園児が出会えるかもしれません。水辺を好むセキレイなど野鳥も頻繁に訪れるようになるでしょう。

こうした取組は、生きもの共生型農業の一環として、全国各地の農家で導入が始まっています。

**■日本保育協会ほか後援『こども環境管理士資格試験』10月10日（土）申込締切**

（公財）日本生態系協会では、園児の豊かな感性を育むために、自然について正しい知識をもち、自然がもつ保育力を積極的に活かすことができる保育士、幼稚園教諭、支援者を「こども環境管理士」として認証しています。現在、認証者は約 1,000 人。
詳しくは、こども環境管理士資格試験のサイトをご覧ください。